

高等学校・専攻科における学校適応感と職業的アイデンティティの関係

— 高等学校看護の生徒・学生を例に —

三津橋 佳子 埼玉県立常磐高等学校
関 由起子 埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：学校適応感、職業的アイデンティティ、看護教育、5年一貫養成課程

1. はじめに

アイデンティティは個としての自己の存在証明であると同時に、他者とのつながりの中での自己、社会における位置付けによっても捉えられるとしており、エリクソン¹⁾はアイデンティティ形成における他者との関係性の重要性を強調している。青年期においては個としての自分と、他者との関係の中での自分との間で葛藤を経験するが、その葛藤を克服することによって、アイデンティティが形成されるとの報告もある²⁾。先行研究においても、個と他者との関係性がアイデンティティ形成に影響するとの報告されており³⁻⁵⁾、青年期のアイデンティティ形成において、彼らの所属する社会との関わりが重要である。

青年期の所属する代表的な社会として学校があげられる。エリクソン¹⁾は「子どもたちは子どもと大人との間の時期に学校に行く。学校は、それ自体が1つの世界であって、そこには特有の目標や限界があり、特有の成功や失望がある」とし、「その期間に個人は、自由な役割実験を通し、社会のある特定の場所に適所を見つける。適所とは、あらかじめ明確に定められた、しかもその人にとっては自分だけのために作られたような場所である。それを見つけることによって、若者は内的連続性と社会的斉一性の確かな感覚を獲得する。そしてその感覚が〈子どもだった時の自分〉と〈これからなろうとしている自分〉との間の橋渡しをし、〈自分について自分が抱いている概念〉と〈所属している共同体がその人をどう認識しているか〉を調和させる」としている。つまり高校生にとって、役割実験をする場の大部分が学校であり、学校という社会にどう所属し、また他者との関係性をどのように持ち過ごしているかがアイデンティティの形成に関連が深いと思われる。

学校という社会での関係性を示すものとして、学校生活に適応しているという感覚である学校適応感がある。栗原と井上は学校適応感を学校という環境との主観的な関係とし、行動的側面、学業面、友人や教師との関係、対人的側面を基盤とした満足感や達成感、居心地の良さなどから把握している⁶⁾。学校適応感の先行研究では、友人関係における心の居場所との関係⁷⁾、中高生の社会的スキルとの関連⁸⁾、学習意欲や友人関係と学校適応感の関連⁹⁾等が報告されている。また、学校適応感がキャリア意識を高めることも明らかにされている¹⁰⁾。青年期女子のアイデンティティ形成において、他者との関係性が重要であることや¹¹⁾、職業選択や職業活動のプロセスの中で自己の振り返りが行われアイデンティティ形成が促進されること¹²⁾が報告されている¹²⁾。

高等学校における看護教育は、高等学校への進学率の向上に伴う高等学校教育の多様化の必要性、女性の職業分野への進出、看護職員の不足等の社会背景のもとに始まった。昭和39年に准看護師養成のための衛生看護科が高等学校に設置され、平成14年には5年一貫教育による看護師養

成が開始された。高等学校看護（以下5年一貫校という）は、これまでも強い使命感や高い勤労意欲をもった生徒を輩出し、医療現場や地域社会からの高い評価が聞かれる一方で、5年間のモチベーション維持・継続が困難な生徒の存在により、看護職への職業アイデンティティ形成の課題が指摘されている¹³⁾。高校生の職業的アイデンティティ形成に関する研究を見てみると、高校入学後に自分自身と周囲の環境（たとえば教師・友人関係や学業など）を再構築しようとする働きが生じて新環境への適応が促進され、それがキャリア意識の向上に関与していたことや¹⁰⁾、高校生がポジティブな未来イメージを持つためには友人関係、進路意識、行事やホームルームなどの特別活動が重要であること¹⁴⁾、明確な未来イメージは学校適応感を高め、かつ職業的アイデンティティ形成も促す¹⁵⁾との報告がある。高校生である5年一貫生にとって、多くの時間を過ごす学校への適応感が個としての在り方と他者との関係性を示すのであれば、そのプロセスが職業的アイデンティティの形成に影響する可能性がある。つまり5年一貫生に対しては、未来の看護師としての自分のイメージを明確に持てるよう職業専門教育をするとともに、高校生であることを意識し学校適応感を向上させるための支援が、結果的に職業的アイデンティティ形成を促すことにつながると思われる。生徒学生の学校適応感を促すことは、自分の居場所と仲間との関係性が形成されることであり、それには、友人関係、学習適応感、教師サポート、社会的スキルなどのさまざまな面で教育的支援が可能となる。

そのため本研究は中学卒業時に看護師という職業選択をした5年一貫生を対象に、職業的アイデンティティの形成において、生徒・学生の学校適応感との関連を検討することを目的とした。

2. 方法

2-1. 調査対象者と調査方法

A県高等学校看護（5年一貫養成課程）に在籍する1年生から5年生、全391名を対象とし、平成27年3月9日～3月24日に、各担任を通して無記名自記式調査票の配布および回収を行った。

2-2. 調査項目

(1) 職業的アイデンティティ

青年期における職業的アイデンティティを、岡本と松下は「職業的アイデンティティとは自分らしさの確立と深くかかわりながら、職業に関心をもち働きかけることによって達成されていく」¹⁶⁾と、また小沢は、「アイデンティティをもつとは自分が自分であることをイコールで結ぶこと、納得して受け入れることと」¹⁷⁾している。ここでは、職業的アイデンティティを看護に特化したアイデンティティとし、看護職を選択し勉強していく自分に納得し、将来看護職に就く自分と今の自分をイコールで結ぶ感覚と定義する。本研究では波多野と小野寺が開発した看護師と看護学生を対象としたアイデンティティを測定する尺度¹⁸⁾を職業的アイデンティティ尺度として用いた。各尺度の項目は、4つの下位尺度（職業人としての自己向上・職業人としての自尊感情（肯定的イメージ）・職業的自己関与・職業への肯定的イメージ）で構成され、計12項目である。配点の方法は5段階評定法（5：非常によくあてはまる、4：ややあてはまる、3：どちらともいえない、2：あまりあてはまらない、1：全くあてはまらない）である。この尺度の合計点（range12～60）を職業的アイデンティティとし、得点の高い方がアイデンティティの形成状況が高いとした。

(2) 職業選択意識・傾向

職業選択意識・傾向尺度は、三津橋と関¹⁹⁾が5年一貫生に実施した結果得られたものを用いた。その尺度は看護職への揺らぎと迷い(7項目)、看護職への自信と傾倒(6項目)、看護職を超えた資格志向(3項目)からなり、配点の方法は5段階評定法(5:非常によくあてはまる、4:ややあてはまる、3:どちらともいえない、2:あまりあてはまらない、1:全くあてはまらない)とした。看護職への揺らぎと迷いの合計点(range7~35)、看護職への自信と傾倒の合計点(range6~30)、「看護職を超えた資格志向」の合計点(range1~15)を各尺度として用い、得点の高い方がそれぞれの意識や傾向が強いことを示すとした。

(3) 学校適応感

栗原と井上は学校適応感をとらえるアセス(学校環境適応感尺度)を開発した⁶⁾。これは計30項目6つの因子(生活満足感:生活全体に対して満足や楽しさを感じているか、教師サポート:担任(教師)の支援があるとか、認められているなど、担任(教師)との関係が良好であると感じている程度、友人サポート:友達からの支援があるとか認められているなど友人関係が良好だと感じている程度、非侵害的關係:無視やいじわるなど、拒否的・否定的な友達関係がないと感じている程度、向社会的スキル:友達への援助や関係をつくるスキルを持っていると感じている程度、学習的適応:学習の方法もわかり意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度)で構成されている。本研究では、6因子計30項目を5段階評定法(5:非常によくあてはまる、4:ややあてはまる、3:どちらともいえない、2:あまりあてはまらない、1:全くあてはまらない)にて測定し、各因子別にそれぞれの尺度として用いた。これらは得点の高い方が適応しているという意識が高いことを示すとした。

(4) 生徒・学生の基本属性

基本属性は、三津橋と関¹⁹⁾の5年一貫生を対象とした研究報告から職業的アイデンティティ形成に関連があるとされた項目を用いた。

- 学年:現在の所属学年1~5学年を尋ねた。
- 看護職決定時期:小学校3年生までに決めたか、小学校4年生から中学校2年生までに決めたか、中学校3年生の高校入学直前に決めたかを尋ねた。
- 受験決定者:A校の受験を自分で決めたのか、自分以外の他者が決めたのかを尋ねた。
- 家族に看護職の有無:家族に看護職がいる・いない、の2択で尋ねた。
- 経済的困難:経済的要素有無を確認する方法として、本校の志望理由で「お金(学費)がかからない」を答えたか否かで、経済的理由があることを確認した。

また、性別に関しては男子が少人数であることから、個人を特定しないよう配慮する理由で問わなかった。

2-3. データ分析方法

(1) 学校適応感尺度30項目を主因子法、Promax回転の因子分析を行い、その6因子構造を確認した。次に学校適応感の6因子ごとの合計点のCronbachの α 係数を算出し信頼性を再度確認した。その後、学年別の得点傾向を見るために一元配置の分散分析を行った後、多重比較(Turkey法)にて検討した。

(2) 職業的アイデンティティ尺度12項目、職業選択意識・傾向尺度(看護職への揺らぎと迷い7項目、看護職への自信と傾倒6項目、看護職を超えた資格志向3項目)のそれぞれの

Cronbschの α 係数を算出し、その内的整合性を確認した。その後各尺度間および学校適応感6因子との関係をピアソンの積率相関係数にて検証した。

- (3) 職業的アイデンティティ尺度の関連要因を検討するために、職業的アイデンティティ尺度と生徒・学生基本属性との関連を単変量解析（分散分析、t検定）にて確認した後、職業的アイデンティティ尺度を従属変数、生徒・学生基本属性、職業選択意識・傾向尺度3因子、学校適応感6因子を独立変数として段階投入する分散分析および共分散分析を行った。

分析には、統計解析用ソフトウェアIBM SPSS Statistics version22を使用し、有意水準は5%以下とした。

2-4. 倫理的配慮

本研究の手続きとして、調査の趣旨、方法及び倫理的配慮を校長に説明し、職員会議で許可を得た。また、調査前に研究の目的と倫理的配慮（対象者に調査の参加は強制ではないこと、回答は自分の意志で決めることができること、個人の成績評価には一切関係しないことや、回答したくない場合はしなくてもいいこと、それによる不利益はないこと、また調査用紙は研究目的のみに使用し、すべて番号で取扱いデータとして処理し、個人が特定されないこと）について文書で説明し、了承を得た。

3. 結果

3-1. 調査対象者の概要

対象者391名のうち380人(1年生80名、2年生78名、3年生75名、4年生73名、5年生74名)より回答があった(回収率97.2%)。看護職決定時期については小学校3年生までの早期に決定した者が約36%、家族内に看護師がいる者は約37%、A校の受験に関しては、自分の意思で決めた者が約65%、中学校3年生の直前に受験を決めた者が約54%、経済的な理由(学費が安い)ことが理由である者が55%であった(表1)。

表1 対象者の基本属性

	人数	%
学年	380	100.0
1年	80	21.1
2年	78	20.5
3年	75	19.7
4年	73	19.2
5年	74	19.5
看護職決定時期	356	100.0
小学校前～小3	83	30.6
小4～中2	185	43.8
中3	88	25.6
家族に看護師の有無	374	100.0
いる	84	36.8
いない	290	63.2
A校受験決定者	373	100.0
自分で決めた	335	65.0
自分以外	38	35.0
A校の受験決定時期	373	100.0
直前(中学校3年)	182	54.1
それ以前	191	45.9
経済的理由によるA校選択	380	100.0
はい	209	55.0
いいえ	171	45.0

3-2. 学校適応感アセスの因子構造について

学校適応感30項目のCronbschの α 係数は.880であり信頼性が確認された。次に30項目を主因子法、Promax回転による因子分析を行った結果、固定値1以上の因子が6つ認められ、すべて因子負荷量が0.4以上であった。抽出された因子はすべて栗原と井上の報告⁶⁾と同様であり、因子構造が確認された。それぞれの尺度のCronbschの α 係数は教師サポートが.880、生活満足感が.820、友人サポートが.822、非侵害的関係が.794、向社会的スキルが.791、学習適応感が.718であり、信頼性が確認された。

3-3. 学校適応感の学年別推移について

学校適応感の6因子それぞれの学年ごとの推移を検討した。その結果、生活満足感については学年の間に有意な差が見られ、2年生と5年生が高く、4年生が最も低かった。教師サポートは1年生が最も高く、3年生が最も低かった。学習的適応では1年生から5年生まで順に高くなり、1年生と4年生、5年生、3年生と5年生との間に有意な差が見られた。友人サポート、非侵害的關係、向社会的スキルについては学年差が見られなかった(表2)。

表2 学校適用感6因子の得点と学年差

			生活満足感			教師サポート			友人サポート		
学年	総数		Mean	SD	F値	Mean	SD	F値	Mean	SD	F値
	380		15.28	4.11	3.31 *	16.01	4.07	2.57 *	19.39	3.60	0.89
1年	80		15.30	3.91	* * * * *	17.03	3.77	* * * * *	19.55	3.72	
2年	78		16.03	4.13		15.45	4.28		18.82	3.80	
3年	75		15.03	3.91		15.15	3.94		19.52	4.09	
4年	73		13.96	4.01		16.23	4.10		19.23	3.11	
5年	74		16.04	4.33		16.14	4.10		19.85	3.16	

			向社会的スキル			非侵害的關係			学習的適応		
学年	総数		Mean	SD	F値	Mean	SD	F値	Mean	SD	F値
	380		18.04	3.24	1.25	19.74	3.76	1.64	13.80	3.84	6.70 **
1年	80		18.31	3.19		20.15	3.48		12.36	3.64	* ** * * *
2年	78		17.44	3.60		19.31	4.25		13.77	3.73	
3年	75		18.39	3.10		19.97	3.48		13.39	4.00	
4年	73		17.78	3.20		20.25	3.48		14.23	3.28	
5年	74		18.26	3.03		19.00	3.94		15.36	3.96	

各因子ともにrangeは5~25点である。分析は分散分析を行い多重比較はTurky法を用いた **: $p < 0.01$ *: $p < 0.05$

3-4. 職業的アイデンティティ、職業選択意識・傾向、学校適応感との関連の概要

職業的アイデンティティ、職業選択意識・傾向、学校適応感との関連の概要

職業的アイデンティティの平均値は 42.4 ± 6.75 (range12~60)、Cronbschの α 係数は.877であった。職業選択意識・傾向の看護職への揺らぎと迷いの平均値は 19.1 ± 4.90 (range7~35)、Cronbschの α 係数.750、看護職への自信と傾倒は 24.0 ± 3.50 (range6~30)、 α 係数.715、看護職を超えた資格志向は 10.1 ± 2.45 (range1~15)、 α 係数.703であり、信頼性は確認された。各尺度間の関係をピアソンの積率相関係数で検討したところ、職業的アイデンティティはすべての因子と相関関係が見られ、看護職への揺らぎと迷いとでは負の関係、他は正の関係が見られた。看護職への迷いと揺らぎでは、生活満足感以外のすべてに関連が見られ、看護職への自身と傾倒では学習的適応を除くすべてに関連が見られた。また、学校適応感の6因子間では有意に関連性が見られた(表3)。

3-5. 職業的アイデンティティと関連する要因の検討

職業的アイデンティティと生徒・学生の基本属性の関連を見ると、学年で差が見られ、1年次が最も高くその後3年次まで下がり続け、その後4年次、5年次と回復していた。単変量解析の結果では1年次が3年次、4年次、5年次に比べ有意に高くなっていた。

次に多変量解析にて検討したところ、基本属性のみを投入したモデル1では、学年、受験決定者のみに有意な差が見られた。さらに学校適応感6因子を追加したモデル2では、学年が低いほど、

表3 各尺度の関係

	職業選択意識・傾向				学校適応感					
	職業的アイデンティティ	看護職への揺らぎと迷い	看護職への自信と傾倒	看護職を超えた資格志向	生活満足感	教師サポート	友人サポート	非侵害的関係	向社会的スキル	学習的適応
職業的アイデンティティ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
職業選択意識・傾向										
看護職への揺らぎと迷い	-.44 **	—	—	—	—	—	—	—	—	—
看護職への自信と傾倒	.60 **	-.43 **	—	—	—	—	—	—	—	—
看護職を超えた資格志向	.22 **	.07 *	.18 **	—	—	—	—	—	—	—
学校適応感										
生活満足感	.29 **	-.10	.19 **	-.02	—	—	—	—	—	—
教師サポート	.35 **	-.26 **	.31 **	.01	.42 **	—	—	—	—	—
友人サポート	.24 **	-.12 *	.17 **	.04	.45 **	.42 **	—	—	—	—
向社会的スキル	.39 **	-.12 *	.28 **	.17 **	.21 **	.25 **	.41 **	—	—	—
非侵害的関係	.12 *	-.18 **	.17 **	.00	.33 **	.38 **	.48 **	.27 **	—	—
学習的適応	.18 **	-.23 **	.10	.06	.19 **	.16 **	.09 *	.17 **	.10 *	—

ピアソンの積率相関係数 **:p<0.01 * :p<0.05

受験決定者が自分であるほど、学校適応感の教師サポートと向社会的スキル、そして学習的適応が高いほど、看護職への職業的アイデンティティが形成されていた。次に職業選択意識・傾向の3因子を加えたところ（モデル3）、その3因子がすべて有意に影響したが（看護職への揺らぎと迷いが低い、看護職への自信と傾倒が高い、看護職を超えた資格志向が高いほど職業的アイデンティティ形成度が高い）、さらに学年が低い、家族に看護師がいる、学校適応感では非侵害的関係と向社会的スキルが高い場合に有意に職業的アイデンティティが形成されていた（表4）。

4. 考察

4-1. 学校適応感の推移とその関連要因

本研究では5年一貫生の学校適応感を調査し、学年別の推移について詳細に検討した。以下に学校適応感の6因子別にその推移の意味について検討する。

友人サポート

学校適応感は青年期の生徒・学生にとっての居場所⁷⁾やキャリア²⁰⁾との関連が強く、またその居場所の感覚を左右する因子として友人関係が大きな影響を与えるといわれている。臨床心理学では居場所とは、「自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないところ、自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せるところ、自分の気持ちを素直に表現しても否定されない、自分の役割を自覚できる」²¹⁾とされており、学校での居場所は友人との関係で作られることが多くなる。本研究の結果、A校の生徒・学生は学校適応感の友人サポートは学年差もなく5年間安定して高い感覚を得ており、学年を通してより良い友人関係を気づくことが出来ていることが推察された。

非侵襲的関係

良好な友人関係形成は、友人やクラスメイトからの拒否や無視をされないという安心できる学校・教室環境⁹⁾である非侵襲的関係をもたらす。非侵襲的関係は学年差もなく5年間安定しており、また友人サポートとの関連も明らかになった。つまり、本研究においても良好な友人関係は安心できる環境である居場所をもたらしていると考えられる。

向社会的スキル

高校生において社会的スキルは学校適応感と強く関連し²²⁾、また、この社会的スキルが高い者ほど良好な人間関係を形成することができ、アイデンティティ形成につながることも明らかにされている²³⁾。今回の結果では、向社会的スキルも学年差はなく5年間通して安定しており、友人サポー

表4 職業的アイデンティティへの関連要因

	人	平均点	SD	単変量(F値/t値)	多変量(F値)		
					モデル1	モデル2	モデル3
学年	380	42.4	6.75	5.23 ^a **	4.30 **	5.35 **	5.09 **
1年	80	44.9	5.79				
2年	78	43.3	6.64				
3年	75	40.6	7.32				
4年	73	41.3	5.79				
5年	74	41.8	7.33				
看護職決定時期	356	42.8	6.58	3.21 ^a *	0.97	1.78	2.77
小学校前～小3	83	43.0	7.21				
小4～中2	185	43.4	6.27				
中3	88	41.3	6.42				
家族に看護師の有無	374	42.4	6.75	0.38 ^b	1.18	2.30	5.71 **
いる	84	42.7	5.84				
いない	290	42.4	7.03				
A校受験決定者	373	42.4	6.75	3.38 ^b **	5.29 **	6.46 **	2.09
自分で決めた	335	42.9	6.43				
自分以外	38	38.1	8.42				
A校受験決定時期	373	42.1	6.75	2.51 ^b *	0.51	0.25	0.18
直前(中学校3年)	191	41.6	6.95				
それ以前	182	43.4	6.41				
経済的理由によるA校選択	380	42.4	6.75	-1.70 ^b	1.13	0.01	0.19
はい	209	41.9	7.01				
いいえ	171	43.1	6.36				
学校適応感 ^c							
生活満足感						0.52	1.53
教師サポート						7.96 **	1.85
友人サポート						0.04	0.40
向社会的スキル						36.76 **	17.14 **
非侵害的關係						1.33	4.45 *
学習的適応						9.54 **	3.34
職業選択意識・傾向 ^d							
看護職への揺らぎと迷い							24.78 **
看護職への自信と傾倒							55.61 **
看護職を超えた資格志向							17.11 **
R2 乗					0.12	0.33	0.53
調整済み R2 乗					0.08	0.29	0.49

注)単変量は分散分析とt検定、モデル1は分散分析、モデル2と3は共分散分析を行った。 ** : p<0.01 * : p<0.05

職業的アイデンティティは高得点であるほどアイデンティティが形成していることを示す (range12~60)。

a: F値

b: t値

c: 学校適応感各因子は高得点であるほどそれぞれの因子傾向が強いことを示す (range5~25)。

d: 職業選択意識・傾向は看護職への揺らぎと迷い (range7~35)、看護職への自信と傾倒 (range6~30)、看護職を超えた資格志向 (range3~15) からなり、高得点であるほどその意識の傾向が強いことを示す。

トと教師サポートとの強い関連も認められた。栗原と井上も友人サポート、教師サポートと向社会的スキルが相関している場合は、向社会的スキルが良好な人間関係をもたらしていると報告している⁶⁾。つまり良好な人間関係は安定した居場所をもたらし、学校という社会の所属を認識し学校適応感も高めたと思われる。

学習的適応

高校生において友人関係形成意欲に加え、学習意欲が高いほど学校適応が高いことが報告されている⁹⁾。本研究結果において、学習的適応では1年生が最も低く、学年進行に従い有意に上昇していた。この結果は看護の専門的学習が学年進行とともに知識・技術ともに習得できているという感覚が高まっていると考えられ、その感覚は職業専門高校において不可欠と思われる。また、久川²⁴⁾は看護の学習はアイデンティティ達成を促し、またアイデンティティ達成は看護の学習をさらに深めるといふ螺旋状の発達をすることを報告したが、1年生から徐々に学習に適応していると

いう感覚は、卒業時の職業的アイデンティティ形成に関与すると思われる。

教師サポート

また、教師との関係も学校適応感の獲得において重要であり²⁵⁾、教師への信頼感および自己への信頼感は、生徒が認知する学校への適応感に正の影響を及ぼし、教師への不信が学校への適応感に負の影響を与えると報告がある²⁶⁾。さらに専門高校では生徒の目指す職業の経験者が教員になっていることが多いため、自分の目指す職業モデルの存在が適応感を促すと考えられる²⁷⁾。今回の結果では、教師サポートが1年生で最も高く、その後一度低下して再び上昇していた。特に1年生が3年生よりも有意に高く、職業的アイデンティティと同様な変化をしていた。看護職の現実を知り失望し、迷いが生じ職業的アイデンティティが低下する3年生で教師サポートも低下していることから、看護職経験者の教員が多い5年一貫校において、看護職への揺らぎや迷いがある時期には、教師からの支援を得られていないという感覚を抱き、職業的アイデンティティも低下していると推察できる。

4-2. 職業的アイデンティティと学校適応感との関係

多変量解析の結果から、職業的アイデンティティ形成に関連する因子として学年、家族に看護職の有無、学校適応感では非侵害的關係、向社会的スキル、職業選択意識・傾向では看護職への揺らぎと迷い、看護職への自信と傾倒、看護職を超えた資格志向が抽出された。職業的アイデンティティ形成に影響する因子として、友人サポートは抽出されず、向社会的スキルや非侵害的關係が直接影響していた。高校生の学校適応感においては、友人関係がより強い関連を示す²⁸⁾ことも明らかにされており、また良好で親密な友人関係がアイデンティティ形成に影響するとの報告もある^{5,23,29)}。このことから、友人サポートを介して向社会的スキルと非侵害的關係が高まり、その結果として職業的アイデンティティが形成されたと考えられる。また職業的アイデンティティの関連因子として教師サポートも抽出されなかった。この理由として、教師サポートが看護職への選択意識傾向に影響し、その意識傾向が最終的に職業的アイデンティティに関連したと推察できる。

また、現在の看護職への意識や傾向が職業的アイデンティティに大きく影響することも明らかになった。特に看護職への揺らぎと迷いは、職業的アイデンティティだけではなく、学校適応感の5因子と負の相関が認められた。つまり、看護職に対する否定的な思いは職業的アイデンティティだけでなく、学校適応感までも低下させる。これは高校生という段階におけるアイデンティティ形成における危機状態である。高等学校看護においては大学での看護教育と異なり、高校生であることを意識し学校適応感を向上させるための支援が結果的に職業的アイデンティティ形成を促すことにつながると思われる。

5. 結論

高等学校看護5年一貫生に学校適応感の学年別推移について調査した結果、学校適応感因子の教師サポートは1年生が最も高く3年生で低下した後5年生に向けて上昇し、学習的適応では1年生から5年生まで順に上昇していた。また、友人サポート、向社会スキル、非侵襲的關係は学年間での大きな変化はなく総じて高い数値をしめしていた。このことは学年途中での上下変化はあるものの、全体として学校適応感が5年生にむけて徐々に上昇していたことが明らかになった。また、看護の職業的アイデンティティ形成に影響を与える因子は学年、家族に看護師の有無、学校

適応感の向社会的スキル、非侵害的關係、職業選択意識・傾向の看護職への揺らぎと迷い、看護職への自信と傾倒、看護職を超えた資格志向であった。学校適応感と看護職を目指すことへの意志が職業的アイデンティティ形成には重要であることが確認された。高等学校看護においては高校生であることを意識し学校適応感を向上させるための支援が結果的に職業的アイデンティティ形成を促すことにつながることを示唆された。

謝辞

調査の場を与えてくださいました5年一貫校と貴重な時間を割いて調査にご協力くださいました教職員と生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) エリク・H. エリクソン：アイデンティティとライフサイクル（西平直，中島由恵訳），誠信書房，東京，2011（Erik H. Erikson , Identity And The Life Cycle, International Universities Press, New York, USA, 1959）
- 2) 谷冬彦：自我同一性の人格発達心理学，ナカニシヤ出版，京都，2008。
- 3) 宗田直子，岡本祐子：「個」と「関係性」からみた青年期後期・成人期のアイデンティティに関する研究Ⅰ—「関係性」の次元に着目して—，広島大学大学院教育学研究科紀要 3：195-204，2008
- 4) 山田みき：「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ：対人関係の特徴の分析，発達心理学研究 19：108-120，2008
- 5) 松下姫歌，吉田愛：大学生における友人関係と自我同一性との関連，広島大学心理学研究 9：207-216，2009
- 6) 栗原慎二，井上弥：アセス（学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト）の使い方・活かし方，ほんの森出版，東京，2010
- 7) 石本雄真：青年期の居心地感が心理的適応、学校適応に与える影響，発達心理学研究 21：278-286，2010
- 8) 浅川潔司，東由佳，古川雅文：青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究，兵庫教育大学研究紀要 21：99-102，2001
- 9) 藤原和政，河村茂雄：高校生における学校適応と友人関係形成意欲、学習意欲との関連，早稲田大学大学院教育学研究科紀要 22：73-82，2015
- 10) 南雅則，浅川潔司，新見直子ほか：高校生活に対する予期不安と高校生の学校適応感・キャリア意識に関する研究—高校入学後初期段階に焦点をあてて—，キャリア教育研究 32：1-13，2013
- 11) 杉村和美：関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探究：2年間の変化とその要因，発達心理学研究 12：87-98，2001
- 12) 山田みき：進路選択に関する語りにみられる「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティ様態の特徴，広島大学大学院教育学研究科紀要57：185-194，2008
- 13) 文部科学省：高等学校の看護教育に関する検討会報告書，2008。
- 14) 古川雅文，高田晃治：高等学校への適応と未来イメージに関する研究—高校新入生と中退生を対象として—，兵庫教育大学研究紀要 20：169-175，2000
- 15) 佐藤典子：音楽大学への進学理由と進学後の適応に影響を与える諸要因の検討—音楽経験と家庭の音楽環境および家族のサポートについて—，教育心理学研究 53：49-61，2005
- 16) 岡本祐子，松下美知子：女性のためのライフサイクル心理学，p108，福村出版，東京，1994
- 17) 小沢一仁：学び支援の自己理解教育実践「大学生の心理学」を居場所及びアイデンティティの視点から捉える，京都大学高等教育研究 8：59-74，2002
- 18) 波多野梗子，小野寺杜紀：看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化，日本看護研究学会雑誌 16：21-28，1993

- 19) 三津橋佳子, 関由起子: 5年一貫看護師養成課程における生徒・学生の職業的アイデンティティ達成スタイルとその関連要因. 埼玉大学紀要 (教育学部) 65: 131-143, 2016
- 20) 福島謙吾, 小林正幸: 学校居心地感と自己肯定感がキャリア意識向上に与える役割—学校適応支援高等学校での実践—. 東京学芸大学教職大学院年報 3: 177-186, 2014
- 21) 廣木克行: 臨床教育 (Clinical Education) —子どもの居場所をつくる. (神戸大学発達科学部編集委員会編). pp.106-107, 大学教育出版, 岡山, 2005
- 22) 稲垣俊介, 福本徹, 堀田龍也: 高校生の社会的スキルと学校適応感の関連. 日本教育工学会研究報告集15: 587-592, 2015
- 23) 堀岡園子: 青年の友人関係および集団活動への関わり方と自我同一性との関連. 北星学園大学大学院論集 1: 85-97, 2010
- 24) 久川洋子: 看護学生におけるアイデンティティ達成状況と学習行動の関連—アイデンティティ達成への教育の必要性をめぐって—. 天使女子短期大学紀要 18: 1-13, 1997
- 25) 富永幹人: 中学生・高校生の教師への信頼感と学校適応感. 福岡女学院大学大学院紀要 11: 37-45, 2014
- 26) 中本浩揮, 森司朗, 屋良朝栄: 高校生における教師に対する信頼感と学校適応感の関係. 鹿屋体育大学学術研究紀要 35: 1-13, 2007
- 27) 前田智香子: 専門家の職業的アイデンティティ形成の研究に必要な視点. 文学部心理学論集 3: 5-14, 2009
- 28) 大久保智生: 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—. 教育心理学研究 53: 307-319, 2005
- 29) 鈴木貴美子, 長江美代子: 大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達. 日本赤十字豊田看護大学紀要 7: 133-144, 2012

(2017年 9月27日提出)

(2017年11月18日受理)

The Relationship Between Professional Identity and School Adjustment Among Nursing Students in a Five-Year Consecutive Training Course

MITSUHASHI, Yoshiko

Saitama Prefectural Tokiwa High School

SEKI, Yukiko

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This study examines the effect of nursing students' school adjustment on their professional identity using data from students of a five-year consecutive training course at a nursing high school and advanced course high school. Data were collected from 391 student nurses in the first to fifth years of the program, aged 15 to 20 years old, in March 2015. The students were asked to fill out a questionnaire that included items about their professional nursing identity, three occupational identity status tests (wavering and hesitation about becoming a nurse, confidence and commitment in selecting the occupation of nurse, and being qualification-oriented), the Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres (general satisfaction, teacher support, friends' support, anti-bullying relationship, prosocial skills, and academic adaptation), and questions about demographic variables. The results of a multivariate analysis of variance showed that the students who had more "confidence and commitment in selecting the occupation of nurse" and were more "qualification-oriented" had statistically significant higher professional nursing identity scores. Moreover, professional nursing identity was developed among the students who had more anti-bullying relationships and more prosocial skills. To develop students' professional nursing identity more effectively, nursing school teachers need to support the students' school life, such as by promoting better student relationships with friends and teachers to promote social acceptance and friendship, preventing bullying, and building a safe, secure, and welcoming school environment.

Keywords: professional identity, school adjustment, nursing education, five-year consecutive nursing course,